

第2章 価値の分析

2-1 「平戸島の文化的景観」の概要

2-1-1 文化的景観の概要

文化財の名称：平戸島の文化的景観（平成22年2月22日選定、同年8月5日追加選定）

選定基準：二 複合景観

- 一（一）水田・畑地などの農耕に関する景観地
- （五）ため池・水路・港などの水の利用に関する景観地
- （八）垣根・屋敷林などの居住に関する景観地

選定地域の概要：

平戸市は長崎県の北西端に位置し、平戸島・生月島・大島・度島・高島の有人島の他、九州本土北西部に位置する田平地区及びその周辺の島々によって構成される。島嶼が点在する複雑な地形、地質及び豊かな植物相により、平戸市の約20%が西海国立公園として保護されている。現在、市域面積235.6km²におよそ4万人が居住するが、人口は昭和30年代と比較して3万人以上も減少し、離島における過疎化問題は極めて深刻な状況にある。

平戸島の沖積低地は小規模であるため、広域水田などの景観はあまり発達していない。しかし、火山性山地及び溶岩台地を開析した小河川沿いの谷部には、安満岳を取り囲むように防風石垣や石塀を備える、主師、春日、高越、獅子、根獅子、飯良、宝亀、田崎・神鳥・迎紐差の各集落と、その生業の場である棚田が展開する。これらの集落の多くは、16世紀半ばから17世紀初頭にかけて書かれたイエズス会宣教師の書簡において、教会や慈悲の組についての記述とともにその名を確認することができる。また、戦国から江戸時代初期のキリシタン信仰に起源を持ち弾圧時代に潜伏した信仰組織は現在も生月島においてかくれキリシタン⁴としての営みを続け、伝統的家屋の中に御神体である納戸神を祀るほか、周辺地域一帯は、聖なる山や聖水を採取する島、殉教地遺跡などを伴う独特の様相を現在に留めている。

棚田群は、大きなものでは海岸から標高150mを越える地点まで連続している。これらの棚田の石積みには開墾時に出てきた岩石が使用されていると考えられる。岩石の種類により、石積み技術は様々な様式を示しており、地元農家の手によるものの他に、生月の専門的な石工集団の手によると思われるものが含まれる。この集団による活動は20世紀の中頃まで続き、いわゆる出稼ぎであるものの、その技術力は高く評価され、遠く山口県の日本海側においても痕跡を確認することができる。

また、江戸期における本地区の様子は寛永・寛政年間の絵図に描かれている。その中に水田や川、木戸をはじめ、馬垣の様子などを把握することができる。絵の特徴から、馬垣

⁴ 長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書では、信仰を継承している組織がもはや隠れておらず、日本の伝統的なさまざまな民俗信仰と融合し変容している状態から「カクレキリシタン」と定義している。本書においては、国選択無形民俗文化財の名称である「かくれキリシタン」を使用した。

には木柵と石垣があったことが分かるが、特に後者は現在も放牧地において広く使用されている。明暦2年(1656)の田畑清帳を基に享和3年(1803)に作成された抜書をみると、春日地区の水田面積は江戸初期から現在まで大きくは変化しておらず、また耕地や宅地形状及び道の分布も、慶応2年(1866)、明治5年(1872)の図にほぼ一致する。生月島は、江戸時代中期以降は捕鯨の一大拠点として平戸藩の財政を支える重要な役割を担うようになり、最盛期には3000人を越える人々が捕鯨産業にかかわっていた。しかし、地形的制約から農地が限られ、また鯨油の抽出工程においても多量の燃料(薪)が必要であったため、食料及び燃料の供給を平戸島の豊富な森林資源や農地に求めた可能性が高い。江戸中期から近代にかけて、平戸島と生月島は捕鯨を中心として一つの経済圏を成していたと考えられる。

「平戸島の文化的景観」は、かくれキリシタンの伝統を引き継ぎつつ、島嶼の制約された条件の下で継続的に行われた開墾や伝統的な生活及び固有の生業等を通じて形成された棚田や人々の居住地によって構成される独特の文化的景観である。居住地を構成する民家や石垣、寺社仏閣、生業を示す棚田、聖地としての意味を留める安満岳や中江ノ島等の諸要素は、一体性を持って連続し、一つの広域的な文化的景観を形成している。近年の激しい過疎化においても、各集落は伝統的な社会組織に基づいて継承され、かろうじて生業を維持してきたが、現在は住民の高齢化という課題に直面している。

2-1-2 選定範囲

①平成22年2月22日選定を受けた区域

- ・平戸市春日町、獅子町、根獅子町、宝亀町の全域
同 主師町、坊方町、下中野町、大石脇町、木場町、迎紐差町の各一部
- ・面積 1,105.6ha [陸域]

②平成22年8月5日追加選定を受けた区域

- ・平戸市主師町の一部(区域拡大により主師町の全域となる。)、飯良町の全域
- ・面積 349.6ha [陸域]

面積合計①+② 1,455.2ha (図11)

※平戸市高越町、生月町の一部について追加申出に必要な調査及び普及啓発事業を実施している。

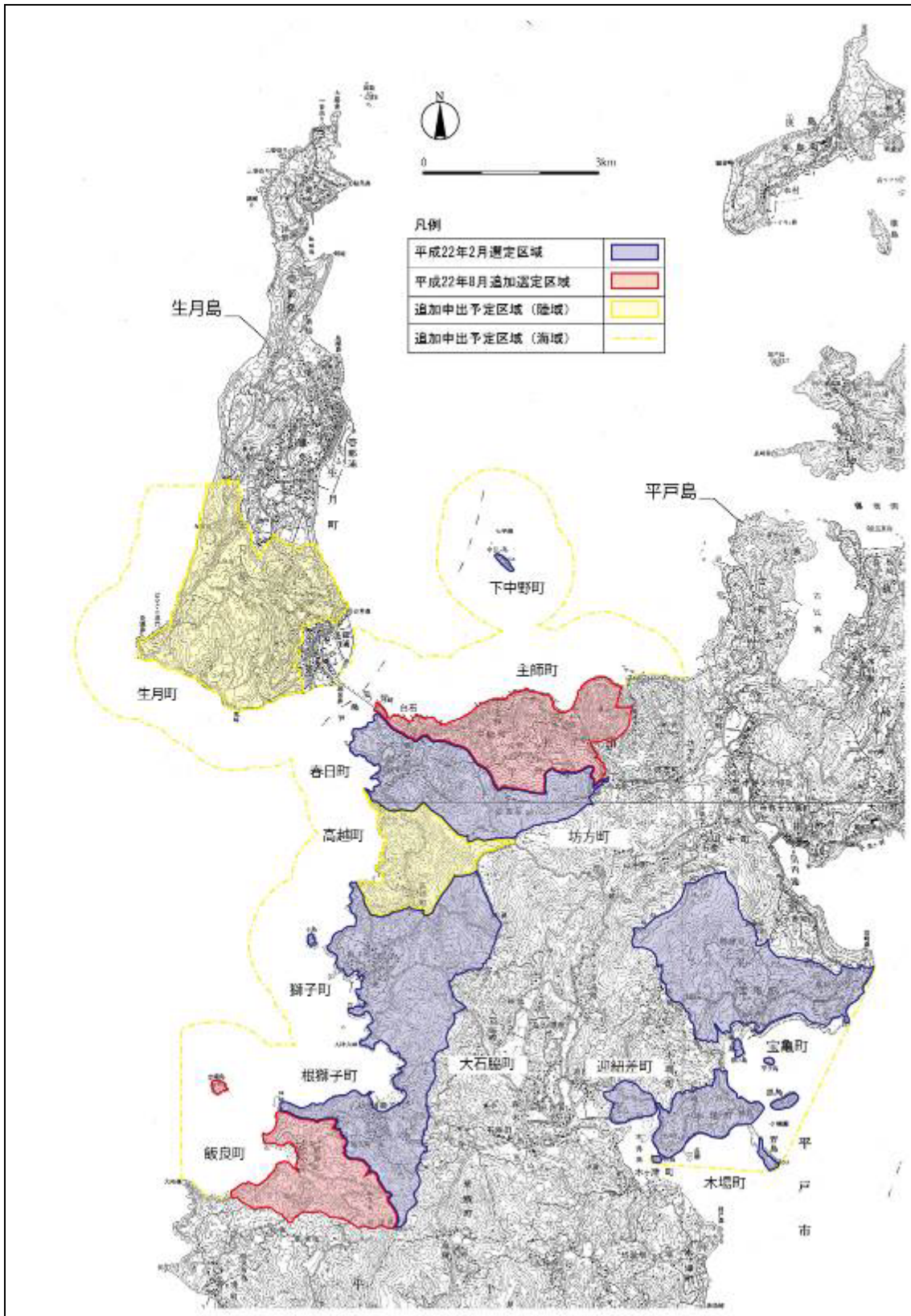


図11 選定範囲図

2-1-3 重要な構成要素

重要文化的景観「平戸島の文化的景観」の景観は、農耕に関する景観地、採草・放牧に関する景観地、水の利用に関する景観地、流通・往来に関する景観地、居住に関する景観地として選定を受けており、また、それらに無形の要素が深く結びついていることが地域の景観に独自性をもたせていることは、文化的景観保存調査及び保存計画で明らかになっている。

16世紀の東西文化交流の痕跡を内包しつつ、現在まで同じ場所で生活を営んできた集落は、木造家屋の中に納戸神を有する家屋や、祀りとともに引き継がれてきた石造物などの諸要素、聖なる山や島など象徴的な場所や参詣の道で構成され、生活を営むために造られてきた棚田は食料の生産という機能的な側面だけでなく祀りの場としても機能してきた。これら様々な要素により構成される集落は、その総体が文化的景観の価値を示していると考えられ、重要な構成要素（図12）として位置づけている。

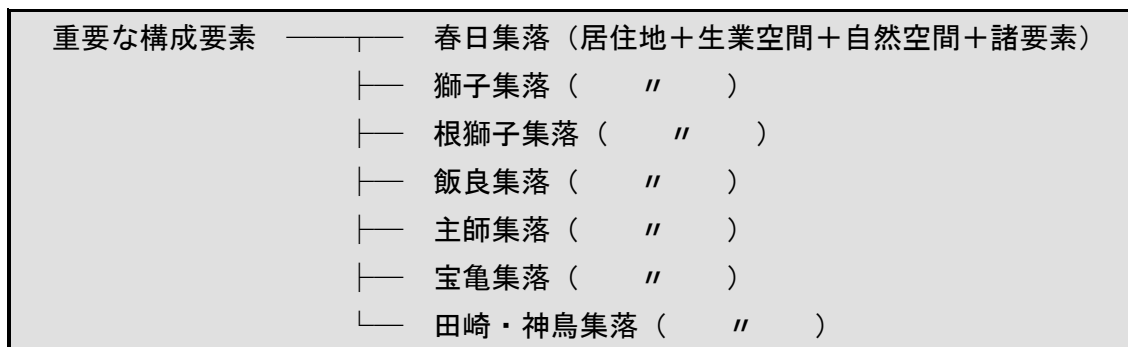


図12 重要な構成要素図（重要な構成要素である各集落は、居住地、生業空間、自然空間などのセットで構成され、更に様々な諸要素が絡み合い、景観の多様性を生み出している。）

集落の中に含まれる諸要素例として、平戸島と生月島の文化的景観保存計画では以下（表6～8）を挙げている。

表6 居住地を構成する要素

番号	種類	名称	管理者	備考
1	住居	民家	個人	
2	事業所	旧根獅子郵便局舎	〃	根獅子地区
3	〃	旧獅子郵便局舎	〃	獅子地区
4	事業所	切支丹資料館	市	根獅子地区・資料展示館
5	神社、寺、教会堂	宝亀教会堂	宗法	宝亀地区・県指定文化財
6	〃	白山比売神社	〃	主師地区・安満岳頂上
7	〃	猿田彦神社	〃	宝亀地区
8	〃	春日神社	〃	春日地区

9	〃	若宮神社	〃	獅子地区
10	〃	八幡神社	〃	根獅子地区
11	〃	三輪神社	〃	田崎・神鳥・迎紐差地区
12	〃	明性寺	〃	獅子地区
13	〃	八幡神社	〃	飯良町地区
18	〃	法樹寺	〃	宝亀地区
19	〃	愛苦会跡	〃	田崎地区
20	集落の石垣景観	集落の石垣景観	個人	各集落の石垣景観として
21	〃	防風石垣	〃	獅子地区・特徴的な石垣景観
22	防風林	集落の防風林	個人	各集落の防風林景観として
23	〃	獅子のアコウ	〃	獅子地区・市指定文化財
24	石造物	三界萬霊塔	自治会	春日地区
25	〃	〃	〃	獅子地区
26	〃	〃	〃	根獅子地区
29	〃	〃	〃	飯良地区
30	〃	〃	〃	宝亀地区
31	〃	カメ石様	〃	〃
32	集落の緑地	根獅子集落の森林	市	根獅子地区・埋蔵文化財包蔵地(ウシワキの森)
33	〃	山野のサザンカ	個人	主師地区
34	墓地	マタラ神父の墓	団体	田崎地区
44	公共施設(公園)	根獅子海浜公園	〃	根獅子地区
45	公共施設(道路)	国道(383号線)	県	宝亀地区
46	〃	県道(主要地方道)	県	平戸島西海岸地域・生月地区
47	〃	市道	市	申出区域

表7 生業空間を構成する要素

番号	種類	名称	管理者	備考
48	棚田	春日の棚田	個人	春日地区
49	〃	獅子の棚田	〃	獅子地区
50	〃	根獅子の棚田	〃	根獅子地区
51	〃	宝亀の棚田	〃	宝亀地区
52	〃	田崎・神鳥の棚田	〃	田崎・神鳥地区
54	〃	主師の棚田	〃	主師地区

56	〃	飯良地区の棚田	〃	飯良町
57	畑地	獅子の畑地	個人	獅子地区
58	牧野	獅子の牧野	団体	〃
62	〃	獅子の溜池	〃	獅子地区
63	石造物	石祠	〃	

表8 自然空間を構成する要素

番号	種類	名称	管理者	備考
64	天然林	安満岳	国有林	主師地区・アカガシ原生林
65	〃	〃	市	主師地区・歩道
66	〃	〃（西禅寺跡）	国有林	主師地区・墓地を含む
67	〃	中江ノ島	団体	主師地区・孤島
68	〃	小島	自治会	獅子地区・孤島
69	二次林	根獅子集落の山	〃	根獅子地区・里山（通称ニコバ）
70	石造物	安満岳の祠	宗法	主師地区・石祠
72	河川	春日川	市	春日地区・景観重要河川（景観計画）
73	溜池	根獅子の溜池	個人	根獅子地区・溜池（お水取りの場）
74	その他	根獅子集落の岩場		根獅子地区・自然海岸（昇天石）
75	〃	根獅子集落の砂浜		根獅子地区・日本の水浴場88選ほか

また、かくれキリシタン信仰や信仰を継続するために引き継いできた御神体・祭具、関係史料などは重要文化的景観保護制度では直接的な保護の対象となっていないが、地域文化を特徴づけるものとして、管理者合意の上、保存と活用策の検討が望まれる。

一般的に納戸神と呼ばれる、かくれキリシタンの御神体は、平戸島西海岸地域において現在は納戸から出され、神棚などに一緒に祀られている（写真1）ことが多い。



写真1 神棚に祀られる様々な信仰対象物

納戸神は、生月や根獅子では以前から有名であったが、16世紀にカトリックの布教があった集落には、何らかの遺物が継承されているようである。

春日地区でも、むやみに人目に触れさせぬものとして神棚で大事に祀られている。

2-2 無形の価値を内包する集落の分析

2-2-1 調査対象地の選定

本項は、平成23年9月に平戸市が国内外の専門家を招き開催した文化的景観フォーラム⁵（写真2）の資料を加筆修正したものである。フォーラムでは、「16世紀の国際交流を起因として発展してきた平戸のかくれキリシタン集落には、その地で生活を営んできた人びとの大小さまざまなサインが景観の中に含まれると思われ、それらのサインを探し、それがどの時代の発展を表すものなのかを読み解くことが重要である。」との指摘があり、「平戸市においては、有機的に形成された文化的景観、組み合わされた文化的景観としての価値が顕著に認められる」との評価を受けた。

集落の文化的景観の価値は、東西文化交流の結果としてキリスト教の影響を受け、計画対象地域において生まれた独自の文化の継承（文化的伝統）にあると考えられる。文化的伝統とは、かくれキリシタンに象徴されるように、キリシタン時代以降に成立し、特に16世紀にカトリックの影響を受けて成立した地域固有の信仰形態とその対象物にあらわれ、現在では生きた文化というよりむしろ集落景観に埋もれた形で残存している。こうした文化的伝統を示す場所が集中する場所は、歴史的な景観を示すものとして価値が高いと考えられる。

また、本資料は、元文化庁文化財調査官で、東京大学先端科学技術研究センターに在籍（平成25年3月現在）している井上典子先生による指導や、様々な関係史料及び発掘調査の蓄積をもとに平戸市教育委員会が地域の変遷を大きな観点から把握するために作成したものの要約である。

（1）布教時における平戸の状況（図13）

平戸の海外交流の歴史は9世紀まではさかのぼることが確認されている。その中で、安満岳は海上交通の目印となって信仰され、中世には密教の信仰の対象であったことが石塔などから確認でき、16世紀には寺院が存在していたことが宣教師報告から確認できる。

西洋との国際交流は、貿易港であった平戸港から始まった。布教に伴って、平戸港には拠点となる教会が設置される。平戸港の後背地である生月島及び平戸島西海岸で領主による一斉改宗が行われる。これらの領地には、教会堂や十字架、墓地が設置されていたことが、当時の宣教師書簡からうかがい知ることができるとともに、その遺構も確認されている。一部の墓地や教会堂の場とその価値については、信仰組織によって引き継がれている。

（2）潜伏時における平戸の状況（図14）

潜伏期に入り、表立った活動ができない中、信仰の中心的な役割を担う場所は家屋内に移行し、集落内には殉教者聖地や墓地などの信仰空間が形成されていく。長期の潜伏期を経る中で、キリシタン信仰のスタイルを継承しつつ地域内には独特の文化的伝統が形成さ

⁵ 重要文化的景観「平戸島の文化的景観」周知啓発フォーラム。東京大学東洋文化研究所所長羽田正教授、法政大学陣内秀信教授、滋賀県立大学布野修司教授、北海道平取町吉原秀樹学芸員、ノヴァ・ゴリツァ大学ユッカ・ヨキレット教授など、国内外の専門家による意見交換が行われた。（各職はフォーラム開催時）

れ、安満岳にもキリシタンの要素が付加されていく。こうして、この地で重層しながら発展してきた集落は、聖なる場所を内包する文化的景観を形成することになる。山や島などの聖域や、集落内に分布する聖地がそれらの景観に意味を持たせている。また、信仰組織により16世紀の聖具や祈りの言葉であるオラショが引き継がれている。

これらの集落の中で、江戸期からの土地利用形態をおおよそ引き継いでいるとが絵図史料⁶で確認できる春日集落は特に文化的景観として価値が高いと思われる。春日集落を含む平戸島西海岸地域は、江戸時代以降、生月島で栄えた漁業を中心とした経済圏の中で機能しつつ一定程度の生活基盤を確立し信仰を継続してきたと思われる。



写真2 対象集落における価値とその保存管理について、北海道平取町や海外の事例を参考に議論が行われた。(写真下2枚) また、現地視察では、地元住民との意見交換も行われた。(写真上)

⁶ 寛政11年(1799)春日牧垣図、慶応2年(1866)安満岳麓図、明治5年(1872)宇図など

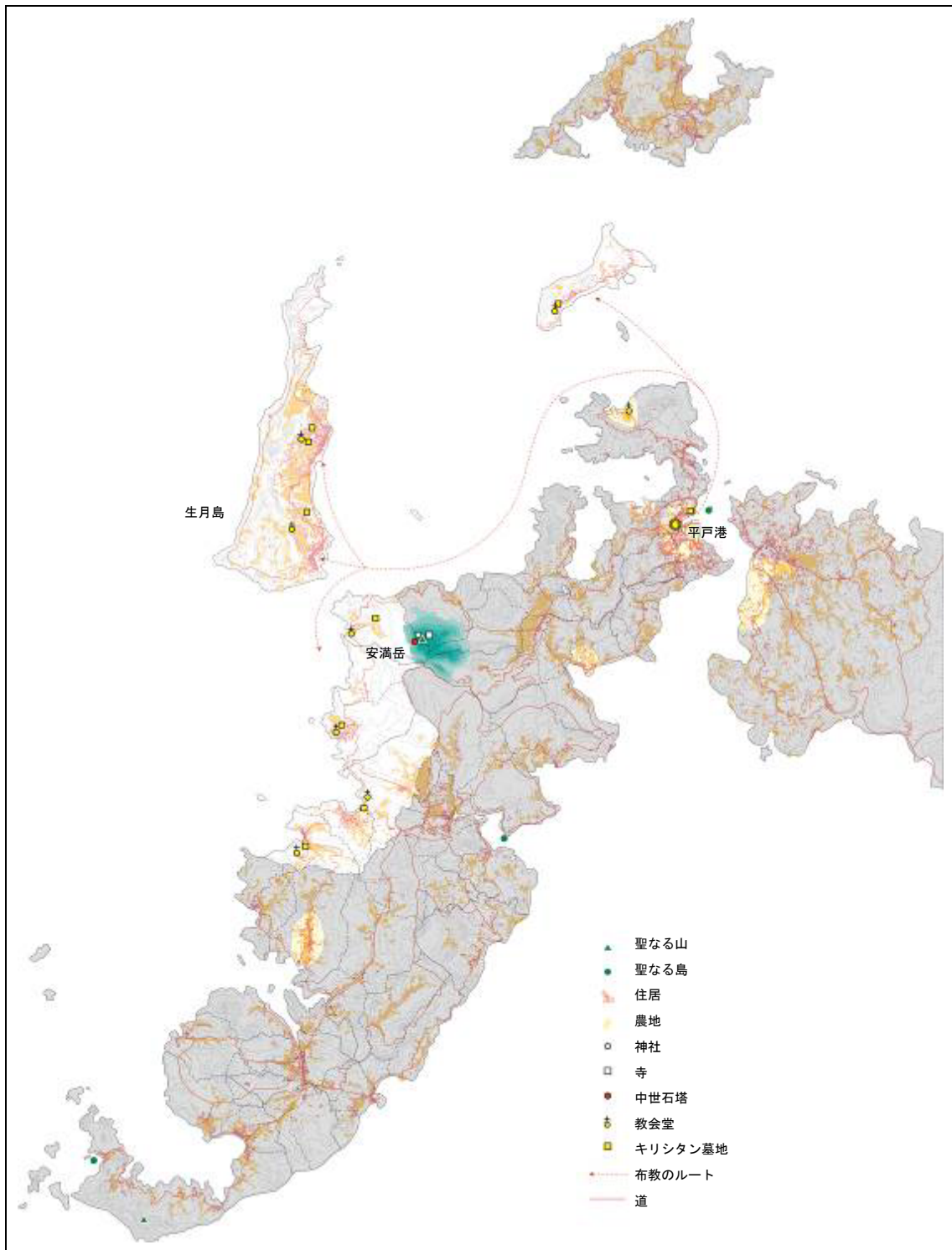


図13 布教時における平戸の状況

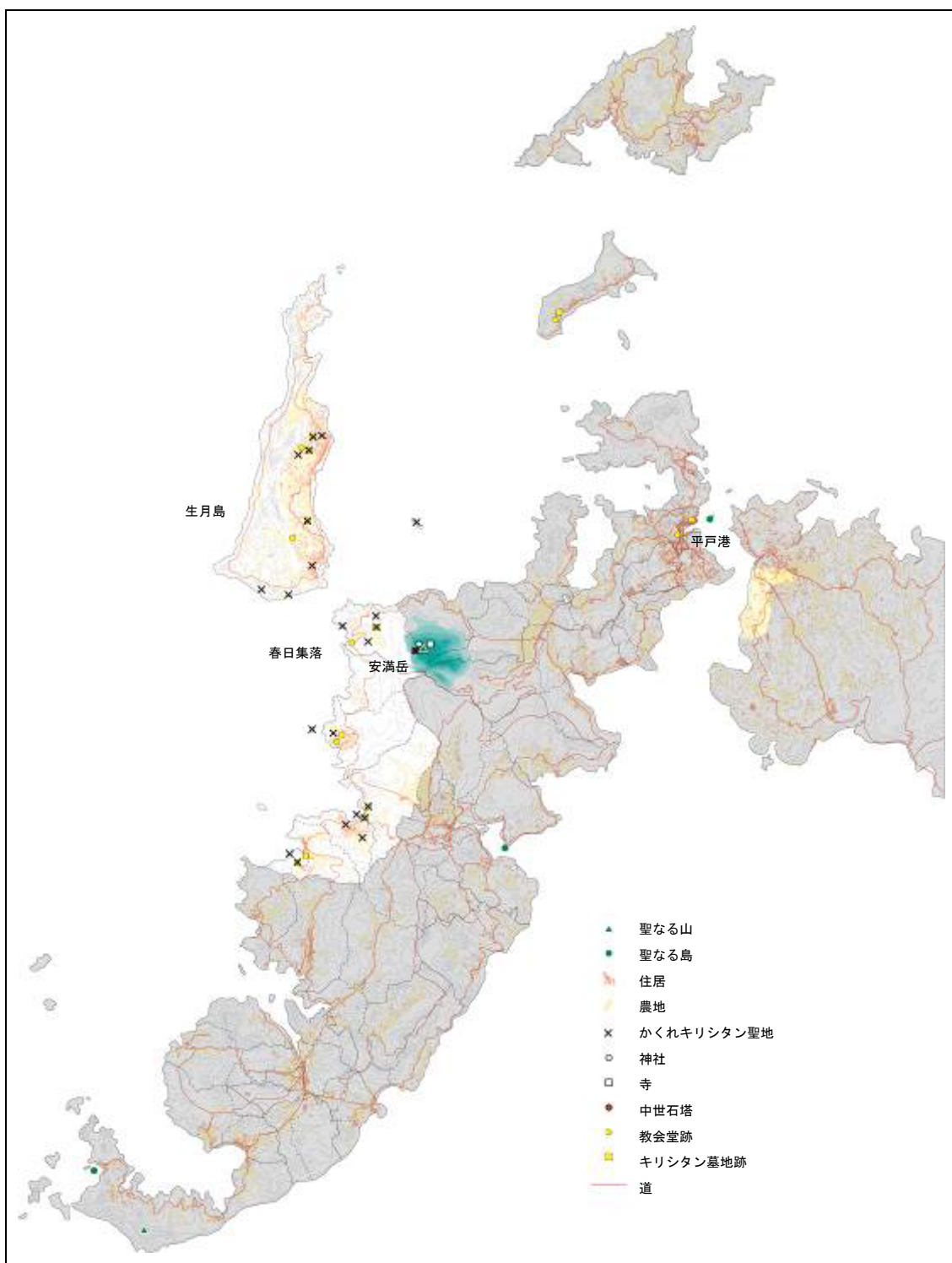


図14 潜伏時における平戸の状況

2-2-2 有形と無形の諸要素が示す相互関係について

平戸島と生月島の文化的景観保存計画 (p19) で示す集落景観における有形と無形の要素のレイヤー構造図に社会システム (ここでは狭義に生業等システムという用語を用いた。) を加筆修正したものが図15である。より具体的には、文化的伝統の観点から、16世紀にもたらされた東西文化交流に基づく景観形成のプロセスとその要因を分析し、その結果に基づき、文化的伝統の集中する地区を特定していく必要がある。その手法については『文化的景観の分析手法に関する報告—無形の要素を中心とした「平戸島の文化的景観」の調査—』(植野、井上 2012) で示したとおり、歴史的観点、有形・無形の観点からレイヤー構造で分析を行う必要があると考えられ、以下は、その概要である。

*

集落の景観は過去から重層し発展してきた有形の要素で構成されているが、そこには無形の意味もあり、それぞれのレイヤー

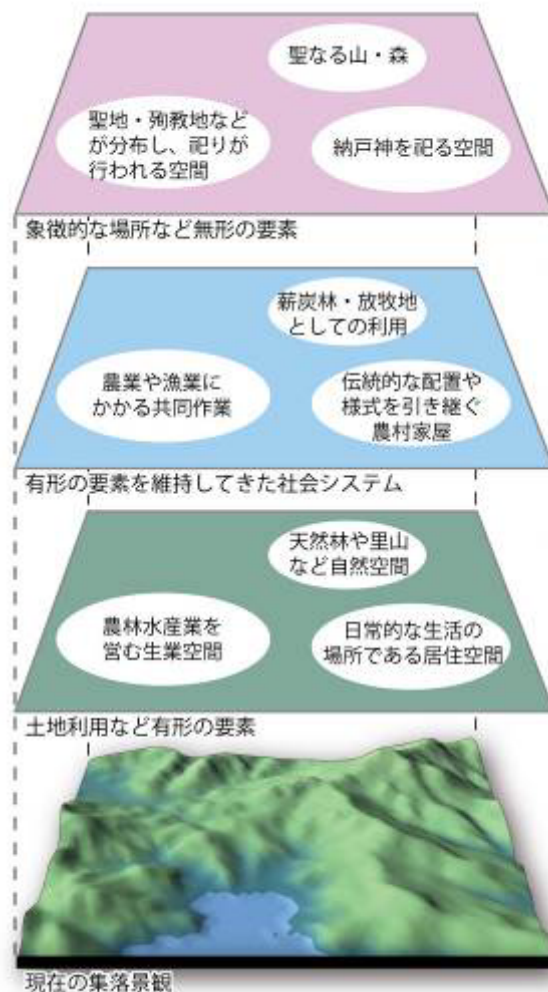


図15 景観のレイヤー構造

を貫いてみることで、場所の意味が明らかになる。例えば、かつての墓地が聖地化することにより森と化し、見た目は同じでも違った意味をもつ森が集落に存在するということである。

また、信仰の対象と信仰主体はセットであることから、場所を単体 (spot) でみるのではなく、それにかかわるコミュニティとの関係を分析し、特定のサイト (place) に注目する必要がある。以下に春日集落の事例を示す。

①家屋 (図16)

教会堂を建てることができなかつた潜伏時代には、主に家屋内に信仰空間が形成され、主にザシキと呼ばれる部屋で様々な行事が執り行われた。春日のキリシタン講も、その本来の意味を失いつつも、講宿を持ちまわりしながら行事を継続してきた。今でも春日集落のいくつかの家屋には納戸神といわれるキリシタンの聖具や御神体を持ち、仏壇や神棚などと共に祀られている。

②集落内の要素 (図17)

集落内に分布する要素は、墓地及び石造物である。石造物には、殉教に由来するものや、

キリシタンに関する伝承を持つものなどがあり、住居がある辺りに集中している。安満岳は、修行者にとっての霊山でありながら、周辺地域の人びとについては、いつの時代も身近な信仰の対象であり、頻繁にお参りされていた。安満岳頂上部分に設置された薩摩塔は、12～13世紀のものとして特定されているが、その他の石造物についてはいつ設置されたものか証明することは難しい⁷。

③道・農地（図18）

集落内には2つの遺跡（丸尾山・堂山）と、それに関係する祀りが確認されている。一般的に農耕に関連する祀りと、発掘調査を行った丸尾山の墓地遺構との関連も見てとれ、そこは春日集落にとっての聖地であることから、潜伏時代以前の聖地がその後も影響をもって存在していたことも考えられ、かくれキリシタンの文化的伝統において、特別な意味を持つ可能性もある。また、山を参詣するための道も存在する。農地は、単なる生業空間ではなく、そこでは様々な祀りや祈りが行われている。

④安満岳

安満岳は古くから信仰されてきた聖地であり、地域の人々も山に登り神社とともに、周辺の石造物を崇拝している。かくれキリシタンの信仰の対象にもなっている石祠⁸が、山の頂上に設置されている。山頂周辺は、アカガシ林が分布し、鳥居や巨石による結界によって囲繞される明らかな聖域がある。その周辺は、近世には草地として用いられ、その後は耕地の開拓や薪の利用といった土地利用とともに、春日集落とも密接な関わりを持っていたことが分かっている。

春日集落においては、16世紀に住民全員がキリシタン⁹となり、その際に生まれた信仰形態と信仰対象の持つ意味が集落の土地利用や生活文化に影響を与え、集落自体に固有の文化的価値を与えてきた。現在、過疎化や高齢化に伴い、その文化的伝統の継続が危機に直面し、あるいは地域住民が祀りなどで行う行為について、本来の意味を認識できなくなっているとしても、文化的伝統は痕跡として集落に残存している。こうした観点から、春日集落において、主要な遺跡が集中するサイト（図19）は東西文化交流に基づいて形成された独特の文化的伝統を現在に伝えるものとして極めて重要であると考えられる。

※平戸島西海岸地域の集落景観に関する調査については、平成24年度に平戸市が東京大学先端科学技術研究センターと受託研究を実施し、取りまとめた「平戸島西海岸地域の景観保全に関する研究」（2013）に詳しい。

⁷ 埋蔵文化財報告書（2012）では、春日集落で発掘調査を行った丸尾山遺跡と堂山遺跡について、キリシタン墓地の可能性を指摘している。

⁸ オラショ（かくれキリシタンの祈りの言葉）の中でも「安満岳奥の院様」と呼ばれるほか、地域では「おろくにん様」、「キリシタン祠」とも呼ばれる。

⁹ 1563年4月17日付「ジョアン・フェルナンデス書簡」によると、春日には一人の異教徒もいなかったと記されている。



図16 家屋

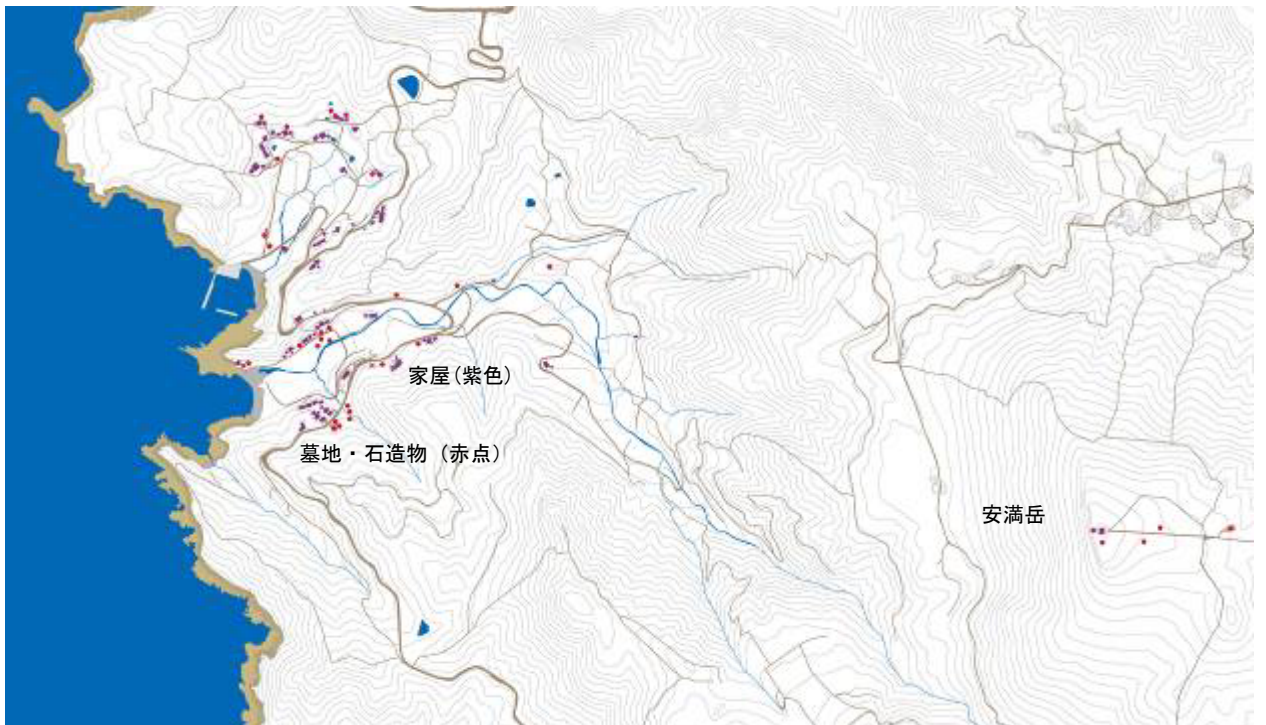


図17 集落内の要素



図18 道・農地



図19 主要な遺跡が集中するサイト (図16～18を重ねたら重要な場所が特定できる。)

2-2-3 建築物の特徴

(1) 集落景観構造

①集落全体の構造

春日は谷の中央を棚田として開拓し、その周囲の谷の斜面に張り付くように宅地が取り囲む。地区の氏神である春日神社は本春日の海の近くに鎮座する。一般的に農家住宅は南に家屋の入口を設け、家屋の南に作業用の庭を配置するが、谷地の春日では平地を確保することが難しく、棚田が宅地より優先されている。その結果、宅地は必ずしも南に庭を配置していない。東側の山から西の海へ向かう谷であるため、谷に沿って、南斜面と北斜面に宅地を確保することになる。小春日は日当りの良い南斜面に多くの宅地があるが、本春日は南斜面が急峻であるため北斜面に立地する宅地の方が多い。(図20)

小春日は大きな河川がなく、溜池で水田をまかなっている。本春日は中央を流れる川と支流から水を引いて水田耕作を行っている。どちらも集落より標高の高い位置まで棚田を築き、特に本春日は標高約150mまで棚田が広がる。

②屋敷地内の建物配置

屋敷地内には前面に作業用の庭を持つ主屋と納屋、隠居屋がある。息子が結婚すると老夫婦は隠居屋に移る。隠居屋を建て替える際に新築された方を主屋とし、古い主屋を隠居屋とする場合もある。従って主屋と隠居屋の位置が立て替えによって変わることが多い。海からの西風を防ぐために、西側には高い生け垣が築かれる。生垣はマキが多い。自家消費用の菜園は敷地内か敷地に近い位置に設けられている。

③工作物の分布

春日は斜面に屋敷地を確保するために石垣で擁壁が築かれているため、石垣が多い。その殆どが野面積みである。その他にも石祠や石神・石仏が見られる。春日神社にはまとめて石祠や石神が置かれている。

(2) 伝統家屋の特徴

調査伝統とする典型的な伝統家屋を選択するために、現在建っている家屋の悉皆調査を行った。その結果を下記に記述する。

①建築用途(図21)

建物55棟の用途は主屋19棟、隠居屋16棟、納屋16棟、倉庫2棟、神社1棟、隠居屋+納屋1棟であった。その殆どの敷地で主屋、隠居屋、納屋が建てられている。現在は納屋や倉庫になっている建物の中には、元牛小屋だった建物もある。かつては各家に使役と堆肥作りのために牛が飼われていた。

②階数と構造(図22)

階数は、平屋が50.9%と一番多く、残りの50%は中2階、2階建ての建物になっている。隠居屋に平屋が多く見られる。構造は、木造が92.7%を占めている。RC造も4棟あり、住宅主屋1棟、隠居屋1棟、神社1棟、隠居屋兼倉庫1棟となっている。RC造は割合としては少ないが、外観の形や色がこれまでの地域の様式とは明らかに異なり、集落景観の中

では異質である。今後の RC 造の新築に際しては色彩や形態に関してコントロールが必要である。

③屋根（図23、24、25、26）

調査した建物 55 棟のすべてが直屋で、屋根形状は切妻 49 棟、入母屋 6 棟と、圧倒的に切妻が多い。屋根向きは平入 47 棟、妻入 5 棟となっており平入が多い。隠居屋に限っては全て平入の屋根になっている。屋根材料は瓦 49 棟、スレート 3 棟であった。上屋梁間は 3 間が 28 棟、4 間が 11 棟、2.5 間が 5 棟、2 間が 5 棟、3.5 間が 3 棟、4.5 間が 1 棟、5 軒が 1 棟となった。3 間が一番多く 51.9%である。4.5 間や、5 間は主屋にしか見られない。

④壁仕上げ（図27、28）

1 階壁仕上げは堅板張が 30 棟、土壁が 9 棟、新建材のボード張が 8 棟、漆喰塗 3 棟、漆喰塗+堅板張 1 棟という結果になった。伝統家屋は目地を棧で押さえた堅板張が多い。壁構造は大壁 38 棟、真壁 13 棟となり、大壁が 74.5%を占めている。納屋は真壁が多く見られる。

⑤上手方向

座敷のある上手を正面右手にする家屋は 16 棟、左手が 10 棟となっている。主屋だけでは 11 棟が右手、8 棟が左手で大きな差はないが、右手を上手とする家屋が多い。

⑥伝統家屋

春日地区の伝統家屋は木造切り妻棧瓦葺き平入りの直屋で、屋根裏を倉庫とする平屋造りである。正面と背面に下屋をおろす。昭和になると 2 階建ても多くなる。外壁は堅板張の大壁造りである。

⑦伝統家屋の特徴（図29）

上記のような伝統家屋の典型として A 家の調査を行い、以下のことが分かった。

- ・建設年を示す棟札や墨書はないが、伝聞によると大正 14 年頃の建設で、大工は三吉弥作である。獅子の鹿島から舟で木材を運んできたという。
- ・主屋は切り妻棧瓦葺き平入りの直屋で中 2 階建て、正面と背面に下屋が付く。外壁は新建材で改修されているが、元は堅板張の大壁造りで軒裏露しである。主屋は南面して建ち、庭を L 字型に囲むように敷地東端に西面して隠居屋が建つ。主屋の西に牛小屋があり、敷地の西側は高い生け垣を防風林として配置している。
- ・痕跡調査を基に復原すると、内部の間取りは食い違い四間取りで、土間を左手に通す。縁側は雨戸を引き通し、左右の端に戸袋があった。入口は引き込みの大戸であった。北側にも縁側がある。内部の仕切りは全て建具で、建具を外すと中央の柱を残し広い空間となる。屋根裏の物置には土間から梯子で上っていた。
- ・内部の仕上げは座敷のみが棧縁天井を張り長押を回す。他の部屋は根太天井となっている。チャノマの一部は板張りで囲炉裏があった。
- ・小屋組は和小屋で登り梁により屋根裏空間を大きくとっている。質の高い木材が使われている。

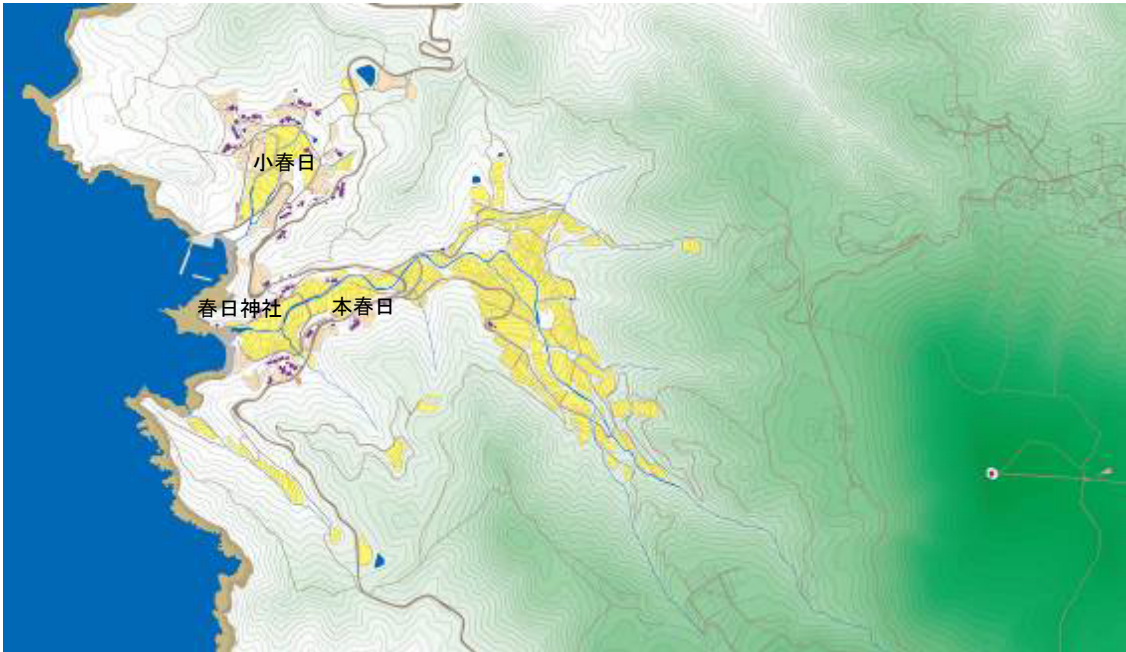


図20 春日集落

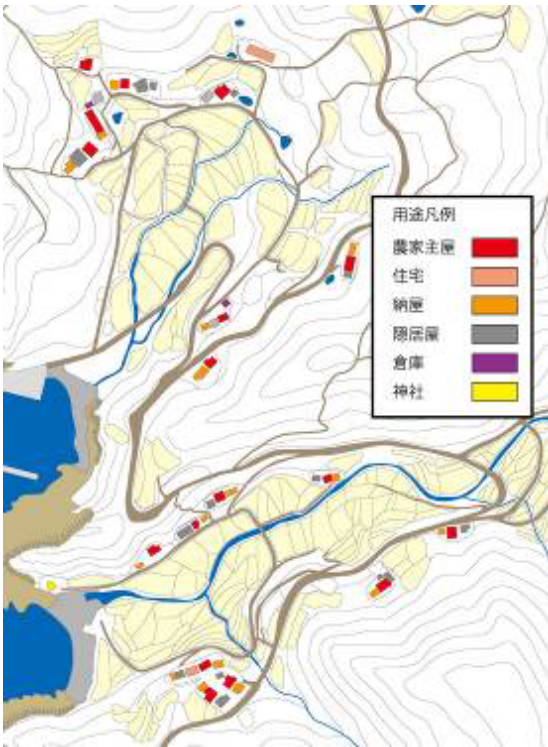


図21 用途

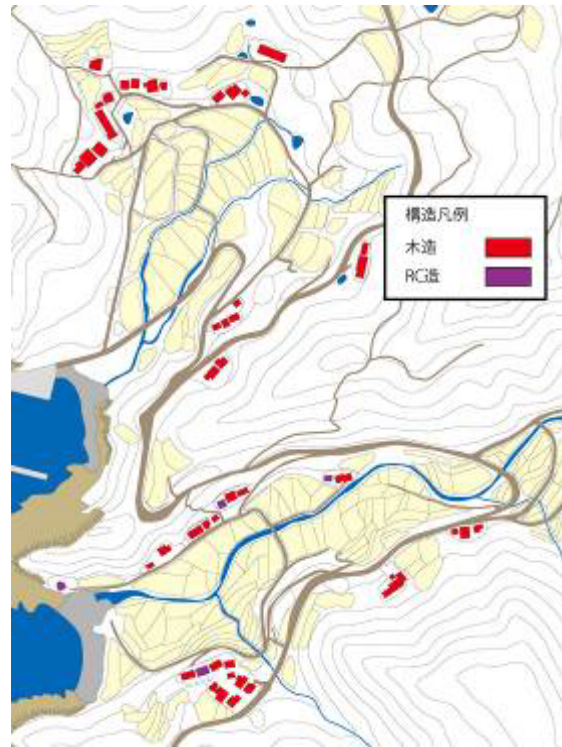


図22 構造

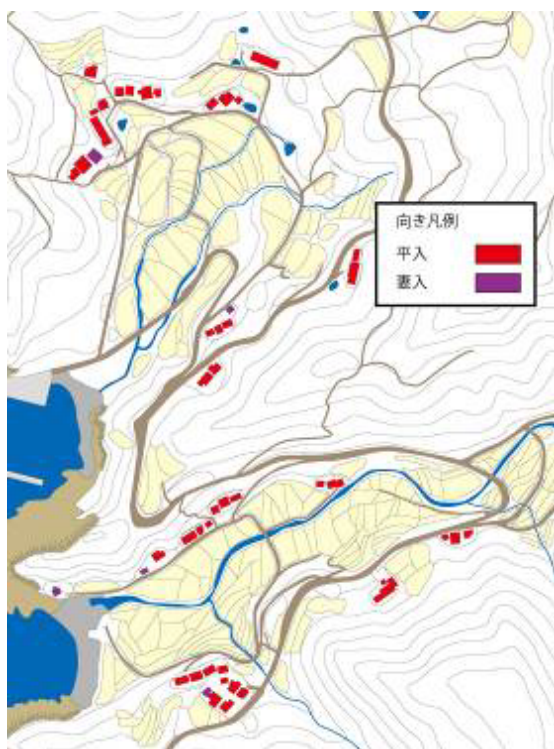


図23 向き

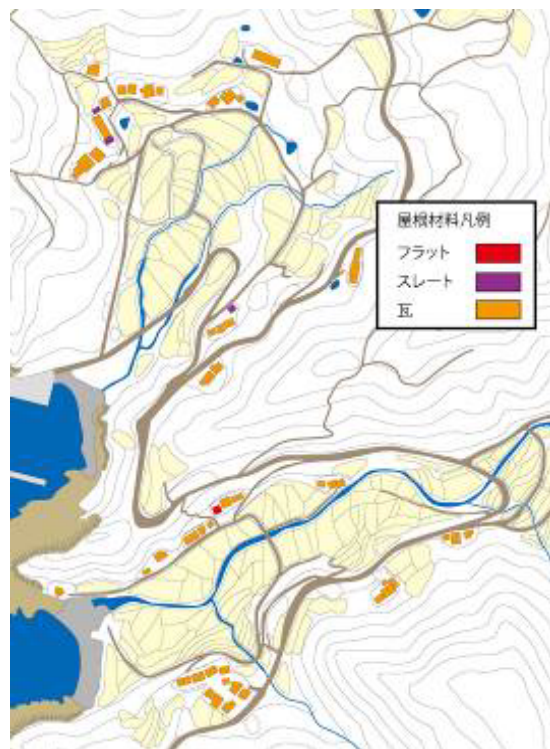


図24 屋根材料

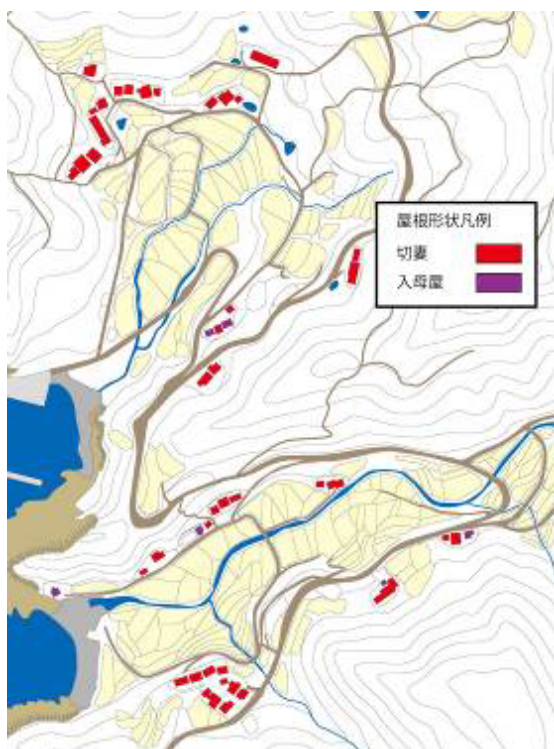


図25 屋根形状1



図26 屋根形状2

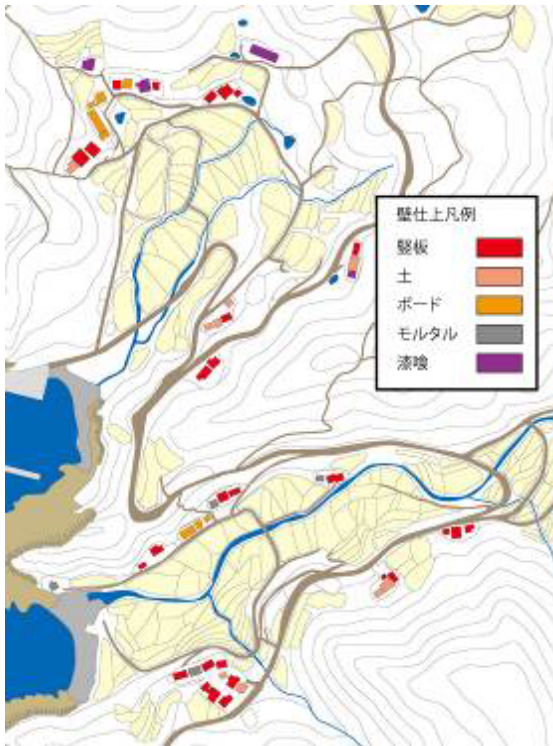


図27 壁仕上

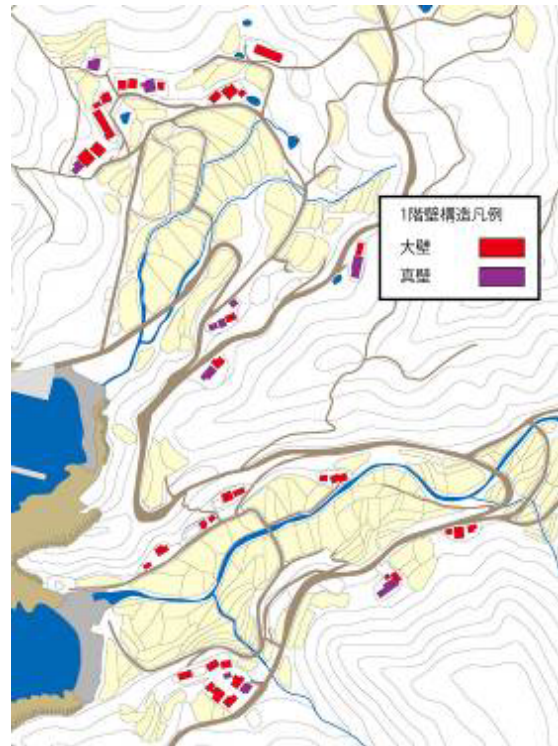


図28 1階壁構造

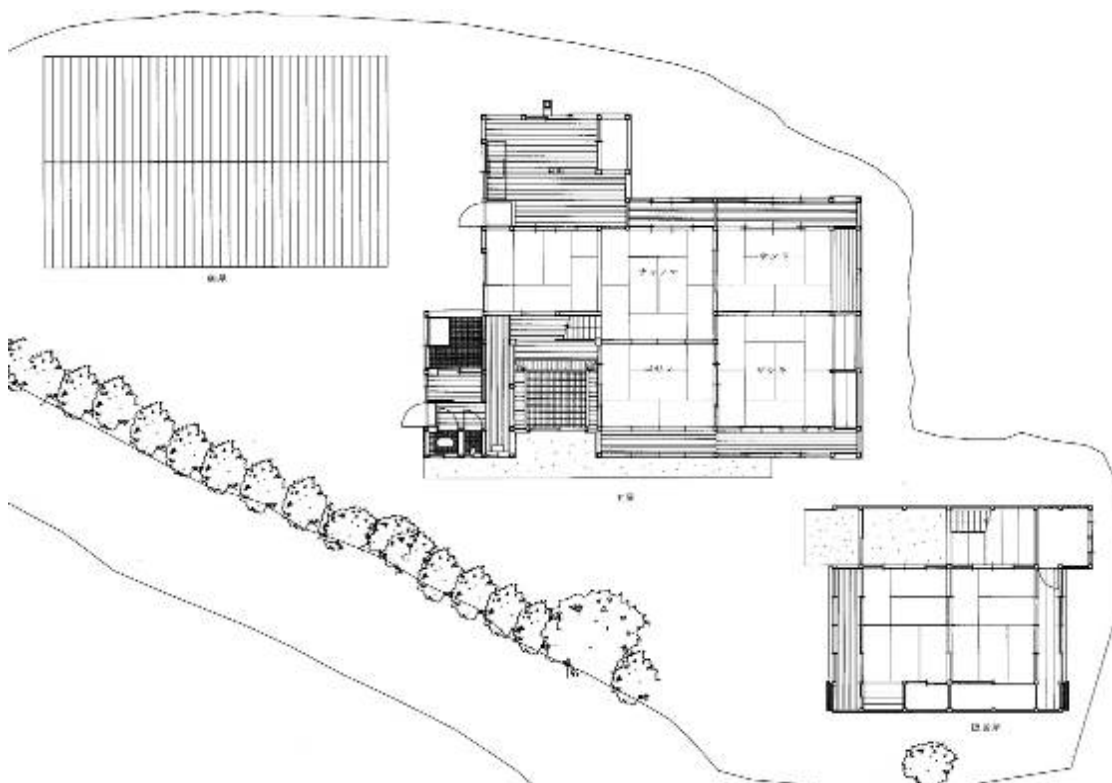


図29 伝統家屋の特徴 (A家配置図)

(3) まとめ

- ①春日の集落は谷の中央に棚田を確保し、その周囲に屋敷地を配する、棚田優先の土地利用となっている。棚田は集落より標高の高い位置まで続き、それが春日独特の景観を形成している。神社は最も低い海に近い位置にある。
- ②伝統家屋は切妻棧瓦葺き平入り平屋建てで外壁は堅板張の大壁造り、軒裏露しである。土壁の真壁造りとしている家屋もある。内部は四間取りが基本で、建具で仕切られている。隠居屋や納屋と共に農村集落らしい家屋になっている。

2-2-4 「平戸島の文化的景観の本質的価値」

計画対象となる集落は、キリスト教の布教が行われた 16 世紀の景観の遺構を留めており、また、その後の潜伏キリシタン時代から現在にかけての平戸の生活生業を示すものとして価値があり、文化的景観として保存・保全する意味がある。

古来から続く日本の文化の上に被さってきたキリスト教の影響が、地域にキリシタン文化¹⁰という新たな文化的伝統を形成し、そうした基層の上に現在の景観や文化が成り立っているということが、この地域の特徴であり、本質的な価値だといえる。

参考文献

- 1) 植野健治、井上典子 (2012) 『文化的景観の分析手法に関する報告 ―無形の要素を中心とした「平戸島の文化的景観」の調査―』,都市計画報告
- 2) 大森洋子 (2012) 『春日の集落景観に関する調査報告書』
- 3) 東京大学先端科学技術研究センター (2013) 『平戸島西海岸地域の景観保全に関する研究』
- 4) 長崎県教育委員会 (1999) 『長崎県のカクレキリシタン 長崎県カクレキリシタン習俗調査事業報告書』
- 5) 平戸市 (2008) 『平戸市総合計画』
- 6) 平戸市教育委員会 (2009) 『平戸島と生月島の文化的景観保存計画』
- 7) 平戸市 (2011) 『平戸市観光統計』
- 8) 文化庁文化財部監修 (2012) 『月刊文化財 590 号』,第一法規株式会社

¹⁰ 本計画書においては、保存調査報告書に基づき、「ポルトガル人などの宣教師によってもたらされ、当時の日本人によって受け入れられ変容しながら引き継がれてきた文化」と定義する。平戸市教育委員会 (2009) 『平戸島と生月島の文化的景観保存調査報告書』,pp.53-54